

『或る女』論*

—木部という人物について—

鄭旭盛**

(e-mail: jungsung@nsu.ac.kr)

目次

- I. 序論
 - II. 木部と葉子の出会い
 - III. 二人の「恋」の饗宴
 - IV. 「本能」もしくは「性」への芽生え
 - V. 結論
-

I. 序論

『或る女』の登場人物の中で、木部という人物はどちらかというと重要人物として分類されることはまずない程作品の中でその存在感は薄い人物である。一般的に『或る女』を論ずる際、重要人物であげられるのは、この作品の主人公の葉子・アメリカ行きの船の事務長である倉地・婚約者の木村の親友で、葉子の面倒を見てくれる古藤らが考えられる。やはり、これらの人物に較べると作品のなかで、木部がしめるその役の重みは確かに貧弱していることは言うに及ばない。

この木部という人物は、実際作品の中で登場する頻度も非常に低いのである。『或る女』は周知の通り、前編が21章（この前編はよく知られているように前作の「或る女グリンピス」の改作である）・後編が28章で、あわせて全49章の構成になっている。しかし、木部の登場は、その前・後編49章の中でも、特に、注目に値するところは、わずか4章（1章と3章は横浜行きの電車の中で偶然に再会する場面、2章は木部との最初の出会いから

* 본 논문은 2011년도 남서울대학교 학술연구비지원에 의해 연구되었음.

** 남서울대학교 일본어과.

二人の結婚生活そして離婚にまで至った木部との過去の回想の場面、37章は鎌倉で偶然に再び再会する場面)にわたって登場するくらいで、他の個所では殆んど注目する程度ではないくらいである。¹⁾

木部という人物の作品上のその役についてひとごとで概括すれば、葉子の過去の夫という役を担う人物であると言える。換言すると、葉子に取り返しのつかない痛い過去歴(子持の離婚した女)を与えた人物であったわけである。一時木部に惹かれた葉子は、親の反対にも関わらず、木部と恋に落ち、挙げ句に、結婚はしたものの、二人の恋は長続きすることなく、はかなく終わってしまう。言ってみれば、これが木部と葉子との関係のすべてである。このように作品の外見上、先も言及したが、木部という人物は現在の葉子象を物語るに当たって、恥ずべき一つの過去歴の相手役を担った登場人物に過ぎないとも言えよう。

このような木部について、この作品における役の重みの理由もあって、それほど木部に注目していなかったことも事実である。手元にある論文の中でも木部と関連のあるものは、次の江藤氏の論²⁾の他には殆んど見つからないと言っていいほどである。その論文の中で江藤氏は登場人物の木部をこう意味付けしている。

後編に於ける木部と定子は、葉子の破滅の有り様を示す存在でもあった。木部と定子の葉子との位置関係を見るならば、そこに葉子を破滅へ向かわせるべく様々の装置が張り巡らされているのがわかるだろう。

この江藤氏の見解は、主に後編の第37章に登場する木部にその論点を置いてある。そして、江藤氏は、後編の第37章の視点を踏まえたうえで、登場人物の木部が葉子を「破滅」に向かわせる装置の役を担う人物として見なしていたのである。その木部が「破滅」的な役を担う人物という江藤氏の見解に異議はなく、むしろ非常に適切な指摘であるように思われる。しかし、本論文は37章に関する検索ではなく、主に第2章に重点を置いて論ずるつもりである。

つまり、この論文の素朴な趣旨は、第2章での木部という登場人物がこの作品にもしくは葉子にいかなる影響関係をはらんでいるのだろうか、というそのような問題に注目してみたい

1) 「こんなことまで比較に持ち出すのはどうか知らないが、木部氏のような実行力の伴わない夢想家は、わたしなどは初めから不賛成だった。」(8章)、「木部と別れてから、何という事なしに捨てばちな心地になって、だれかれの差別もなく近寄って-来る男たちに対して勝手気ままを振る舞ったその間に、偶然に出あって偶然に別れた人の中の一人でもあろうか。」(9章)、「そして十八の時木部に対して、最初の恋愛らしい恋愛の情を傾けた時、葉子の心はもう処女の心ではなくなっていた。」(16章)、「そして木部と別れて以来絶えて味わなかったこの甘い情緒に自分からほどされおぼれて、心中でもする人のような、恋に身をまかせる心安ぎにひたりながら小机に突っ伏してしまった。」(18章)、「しかし考えてみると、木部と別れた時でも、葉子には格別これという謀略があったわけではなく、ただその時々におがままを振る舞ったに過ぎなかったのだけれども、その結果は葉子が何か恐ろしく深い企みと手練を示したかのように人に取られていた事も思った。」(19章)といくらのことである。

2) 江藤茂博「『或る女』・後編の構造に関する試論—木部孤と定子形象の意味—」(『日本文学』1986年6月)

のである。なぜなら、登場人物の木部は、葉子にただの痛い過去歴を与える役を担う人物に過ぎない人であるとはどうしても思わないからである。もしかすると、主人公の葉子に多大な影響を及ぼし、そして葉子にして一代変貌を与えた注目すべき人物（先の引用の江藤氏の指摘のように「破滅」をも含めて色々な影響関係が想定されるが）ではなかったのだろうか。このような筆者の推論については、これから本論を通して明らかにしていくつもりである。しかし、このような論述も言ってみれば、結局のところ、ある意味では葉子象になるのかもしれない。だとしても、この論を通して新たな木部という登場人物の意味を提示したということに意義があると思われる。以上のような理由で、これから木部という人物についてのささやかな一考察を進めることにしよう。

II. 木部と葉子の出会い

葉子に「初恋的」でもあった木部の外見について、本文の中ではこれ以上ない絶賛の言葉を惜しまない。

木部はその性格ばかりでなく、容貌一骨細な、顔の造作の整った、天才風に蒼白いなめらかな皮膚の、よく見ると他の部分の鮮麗な割合に下顎骨の発達した—まで何所か葉子のそれに似ていたから、自意識の極度に強い葉子は、自分の姿を木部に見付け出したように思って、一種の好奇心を挑発せられずにはいなかった。（2）

これだけを見ても、木部という人物の外貌がいかに素晴らしくしかも秀麗な容貌の持ち主であったか推定するにむずかしくないだろう。これだけの外貌の表現をみても、木部は一般的に女性から関心が持てる男であったことは容易に推測されよう。申し分なく、木部は、同年輩の人よりも頭抜けた時代を先駆ける感覚を持っていた葉子の関心を惹くには十分な容貌であったわけである。

しかし、木部はその容貌だけが優れていたわけではない。大新聞社の記者として戦場に従軍し、「月並みな通信文の多い中に、きわだって観察の飛び離れた心力のゆらいた文章を発表して」当時の日本社会で「天才記者」として名をとどろかした才能のある文筆家でもあったわけである。それに、日清戦争は当時の日本で国民的な大きな関心事であっただけに、木部の活躍は一つの「英雄」として讃えられてもいたのである。

当時の日本社会のなかで木部がどのように評価されているのか、本文を見るとよくわかる。

木部の記者としての評判は破天荒といってもよかった。いやしくも文学を解するものは木部を知らないものはなかった。人々は木部が成熟した思想をひさげ世の中に出て来る時の華々しさをうわさし合った。ことに日清戦役という、その当時の日本にしては絶大な背景を背負っているで、この年少記者はある人々からは英雄（ヒーロー）の一人とさして崇拝された。（2）

このように、木部はその優れた容貌もいい、文筆家として才能もいい、今で言うと、超人気のアイドルと同じように日本の国民一般の関心を惹く人気者であった。恐らく、エリートで、真面目で、ロマンチストであった木部は、当時の若い女性から憧れの対象であったはずであろう。木部に対する当時の日本での人気は、若い女性だけにとどまっていなかったのであるようだ。キリスト教婦人同盟の副会長を努めていた葉子の母も、この木部に関心を抱き、葉子の家にまで招待したことをみても、木部がいかにも人気が多かったかわかる。

一方の葉子も葉子で、もうすでに15才の時から流行をリードしていたし、老校長に「思いもよらぬ浮き名を負わせ」たり、自分の気に食わないと言って上野の音楽学校を勝手にやめたり、母の弱点をじゃんとおさえて、一步もひけをとらないくらい、はやいときからただの少女ではなかったのである。しかも、19才になる今の葉子は、もう既に何人の男から関心を持たれながらも、それをうまく操りぬけるほどの「タクト」を持っていた少女であった。しかし、その多くの男達は「自分達の獣性を恥じる」ばかりで、葉子を恨む者はなかったことを見ると、決して<性的>に乱れていたようではなさそうに見える。とにかく葉子は感覚の溢れる、時代の先端を歩んでいたきちんとした女性であったわけである。

このような二人の運命的な出会いは、葉子の母が催した慰労会であった。木部はこの葉子に吸い込まれるように一目惚れしてしまう。葉子も木部の秀麗な容貌に「何所か葉子のそれに似」ったような感じを受けていたのか、何か不思議な好奇心を抱くのである。お互いはこのようにして関心を持ち始めたのである。作品の中ではこのような二人の間の関心についてこう描かれている。

木部の全霊はただ一眼でこの美しい才気の張り溢れた葉子の容姿に吸い込まれてしまった。葉子も不思議にこの小柄な青年に興味を感じた。そして運命は不思議な悪戯をするものだ。

(中略)

木部は燃えやすい心に葉子を焼くようにかき抱いて、葉子はまた才走った頭に木部の面影を軽く宿して、その一夜の饗宴はさりげなく終わりを告げた。(2)

これを見ても分かるように、お互いに相手に関心を抱いていることは、疑いを入れない。しかしこの引用を丹念に読み返してみると、二人の間の関心の濃淡の差が感じられる。木部は「吸い込まれ」るよう葉子に惹かれる。葉子も勿論関心がないわけではないが、木部ほどではないが「興味を感じ」るのではある。このように二人の間では、その関心の濃淡が感じられる。より正確にいうと、濃淡の差というより、お互いに相手に対する関心の身体上の違いに気づくであろう。

木部は「心」に葉子のことを抱き、葉子は「頭」に木部の「面影を軽く宿し」ているのである。このように相手に対する関心を、木部は「心」に、葉子は「頭」にという、身体上の違いを読み取ることができる。「心」という身体上の記号が意味するように、木部は葉子に対する思いがいかにも熱かったかを物語っているのかも知れない。少なくともこれを見る限

り、葉子に対する木部の思いがいかにか切実であったのかは確かなように思われる。

一方、葉子は木部のように「心」ではなく、「才走った頭に木部の面影を軽く宿し」とあるように、その「頭」で関心をしめし始めたのである。これは葉子の木部についての思いが木部ほどのものではなかったことを意味するかも知れない。本文を見ても分かるように、最初葉子はそれほど積極的ではなかったこともそれを裏付けるだろう。しかし葉子も最初は「頭」で関心を示したものの、その後木部が度々葉子の家に訪れ、家中の人々の心を捕らえたりする内に、やっと「心を許して木部に好意を見せ始めた」のである。木部の努力と母に対する反感が募り、葉子も「頭」ではなく、「心を許して」しまうのである。

このような葉子の「頭」から「心」への変貌のプロセスは、一般的に男女の間によく見当たられるプロセスとして理解しても何一つおかしいとは思われない。しかし葉子にとっては、まったくその一般的なこととして理解していいとも限らないような気がする。なぜかというと、葉子はこの「頭」が他の人よりも非常に発達した「頭」型の人であったからである。葉子が「頭」型の人物であることは、作品を見ても十分に察せられることであろう。

何よりも、上野の音楽学校でヴァイオリンを習ったときの回想の場面が、これをよく物語ってくれる。才気溢れる葉子はヴァイオリンを習ってから、わずか二ヶ月もならない内に、教師や生徒達からその才能をほめられる。しかしケーベル博士は葉子の演奏を聞いた後、葉子の演奏を聞いて、その能力の本性を見抜き、こう述べるのである。「お前の楽器は才で鳴るのだ。天才で鳴るのではない」のだと、酷評する。葉子も葉子で、「そうで御座いますか」と、言い捨てて、なにげなしにヴァイオリンを窓から放り出しやめてしまう。あんまりにも、そのやめ方がきっぱり過ぎる。先のケーベル博士の「お前の楽器は才で鳴るのだ。天才で鳴るのではない」という評価の言葉は、よく吟味する必要があると思われる。これは一体何を意味しているのだろうか。もしかすると、博士の評価の言葉は、次のことを言うのではないだろうか。葉子のヴァイオリンは「心」からにじみ出る感性に基づいた演奏ではなく、「頭」でという技巧の慣らしの基で演奏された、即ち一種の頭で覚えただけのことで演奏する浅い技巧にすぎないことを意味するのではなかったのだろうか。心の奥底からではなく、「頭」で習った、もしくは覚えただけのことを演奏しているのだと、ケーベル博士は評価していたのである。

このように、上野の音楽学校の回想の場面からうかがわれるように、どちらかというとな葉子は「心」で接する人ではなく、「頭」で接する人であったわけである。それに葉子は「頭」型の少女であるだけに、感傷にも揺れることのない冷静な少女であったであろう。葉子がいかに冷静な少女であったかは、夫にも負けないくらいただ者ではなかった母の弱点をちゃんと押さえて、一步もゆずらなったり、葉子に近づく男たちをうまく操る行動からいかにも冷静な少女でもあったか十分に分かるだろう。このように、葉子は心の感傷に頼ることのない、冷静な判断力の鋭い「頭」型の少女であったわけである。

さすがの「頭」型の葉子は、先ほども言及したが、木部について最初に関心を示したのもやはり「頭」からであった。「心」ではなく、「頭」で相手に関心を示すということは、

よく考えてみると、外見に敏感であることを意味するのではないだろうか。葉子が木部に関心を抱いたことに「何所か葉子のそれに似ていたから」と言っている。これはまさに木部の外見について葉子がどれほど敏感に反応していたのかを物語っていると言えよう。「心」という内面の世界より、「頭」で判断するビジュアルの世界。先ほども言及したが、木部のビジュアル（その外貌だけではなく、人々から「英雄」として崇拝されている木部という人物）は、「頭」型の葉子にこれ以上ない外見の条件を持っている相手であった。

つまり、「頭」型の葉子には、よく合う相手が木部であったわけである。このような運命的な二人の出会いから、やっと「恋という言葉で見られねばならぬような間柄」にまで発展する。お互いに「恋」が募るにつれて、葉子も「心を許して木部に好意を見せ始め」るのである。葉子も「頭」から「心」に変貌してしまうのである。「頭」型の葉子がいかにして「心」に変貌していたのか、その決定的な原因は、一体何であったのだろうか。それについては、次に節を改めてさらに考察を進めて見ることにしよう。

Ⅲ. 二人の「恋」の饗宴

もう既に過去の「頭」型の少女ではなく、別人のような葉子に変貌してしまったのである。なぜ「頭」型の葉子が「心を許して」しまったと言うように、「心」型の葉子に変貌してしまったのだろうか。一体、何が葉子をそのようにさせてしまったのだろうか。それは次の引用の内容がよく物語ってくれている。

葉子はこんな目くらむような晴れ晴れしいものを見た事がなかった。女の本能が生まれて始めて芽をふき始めた。そして解剖刀のような日ごろの批判力は鉛のように鈍ってしまった。

(中略)

そして木部の全身全霊を爪の先き想いの果てまで自分のものにしなければ、死んでも死ねない様子が見えたので、母もとうとう我を折った。そして五ヶ月の恐ろしい試練の後に、両親の立ち会わない小さな結婚の式が、秋のある午後、木部の下宿の一間で取行なわれた。(2)

何が葉子をこんなに「目くら」ませるほどに変貌させたのだろうか。それは引用の中でもあるように、他ではなく、びりびりする「女の本能」に刺激され、その快感の痺れを味わってしまったからであった。そして始めて味わったその快感の相手が木部であった。もう木部しか目に見えない少女になってしまったのである。引用の内容は、もう葉子は「頭」型の人でもなければ、過去の冷静な葉子でもないことを意味する。それに、葉子の母も「我を折」る程、誰が見ても葉子の木部に対する思いは、もう愛という名に相応しいほど、ただものではないことがわかる。どちらかという、もう木部よりも積極的であると言っていいくらいである。このような変貌は葉子の母（葉子の母の反対が敢えて葉子に火を付けたようなこともあろう

が) や葉子自身の性格 (もともと積極的な性格の持ち主であることは、彼女の学生時代からの履歴で十分に察せられることである) によるものでもあろうが、なによりも直接的な原因は、木部という若い青年に対する<性>の芽生えという一人の少女の運命的な出来事があったからだと思われる。つまり、男女の運命的な出会いとそれと自然的に付きまとう「女の本能」へ自覚がそこにあったわけである。このようにして、二人の「恋」の饗宴は、まるで油に火をつけたように炎々と燃え始まったのである。

しかし、二人の「恋」の饗宴は、祝福をうけることもなく、二人だけの「恋」の饗宴になってしまうのである。家族や知人から祝福された目出度い結婚ではなく、二人だけの寂しい首途であった。しかし、それは二人には何のこともなかった。二人のための隠れ家を構え、二人だけの新婚生活、それだけでも二人は十分に幸せであったわけである。今の葉子は例えこの道が辛いいばらの道であっても、木部との「恋」、木部と味わえる「女の本能」それだけで充分であった。そこには家族も知人も入る隙がない、だった二人だけの世界が存在するばかりである。そしてこのように家族や社会と妥協することなく、例えいばらの道であっても、その道を何の躊躇もなく選んだその根元的な原動力は、今更いうまでもない、「女の本能」への芽生えであったことを見逃してはいけない。

「女の本能」、葉子にとってこの「女の本能」への芽生えということの意味は、なにを物語っているのだろうか。恐らく、それは他ではなく<性>への芽生えと置き換えることができるのではないだろうか。葉子は木部との出会いで、今まで経験したこともない新たな<性>への経験とその<性>の歓喜に芽生えたのである。その歓びは母の反対を退けたばかりでなく、「頭」型の冷静な葉子も変えてしまう原動力でもあったわけである。

しかしこのように完璧であるかのように思われた二人の世界は、いざ二人だけの世界を始める瞬間、はかなく終りを告げようとする。今まで経験したこともない歓喜溢れる<性>という新たな世界に出会った葉子は、<性>の歓びだけに芽生えていたのではない。不幸にもその歓びと同時に<性>の裏に潜んである裏面に会い合ってしまったのである。まず、次の引用を見てみよう。

日清戦争というものの光も太陽が西に沈むたびごとに減じて行った。それらはそれとしていちばん葉子を失望させたのは同棲後始めて男というものの裏を返して見た事だった。葉子を確実に占領したという意識に裏書きされた木部は、今までおくびにも葉子に見せなかった女々しい弱点を露骨に現わし始めた。後ろから見た木部は葉子には取り所のない平凡な気の弱い精力の足りない男に過ぎなかった。筆一本握る事もせずに朝から晩まで葉子に膠着し、感傷的なくせに恐ろしくわがままで、今日今日の生活にさえ事欠きながら、万事を葉子の肩になげかけてそれが当然な事でもあるような鈍感なお坊ちゃんじみた生活のしかたが葉子の鋭い神経をいらいらさせ出した。始めのうちは葉子もそれを木部の詩人らしい無邪気さからだと思ってみた。そしてせっせせと世話女房らしく切り回す事に興味をつないで

みた。しかし心の底の恐ろしく物質的な葉子にどうしてこんな辛抱がいつまでも続こうぞ。結婚前までは葉子のほうから迫ってみたにも係わらず、崇高と見えるまでに極端な潔癖屋だった彼であったのに、思いもかけぬ貪婪な陋劣な情欲の持ち主で、しかもその欲求を貧弱な体質で表わそうとするのに出喰わすと、葉子は今まで自分でも気がつかずにいた自分を鏡で見せつけられたような不快を感じずにはいられなかった。（2）

少し長い引用になってしまったが、ここの引用は注目しておく必要があると思われる。これは二人が夢見ていたはずの二人だけの新居を構え始めて、間もない内のことであるが、二人の新婚生活についてもう後悔の影がうかがわれる。まず、引用の一番目の傍線は、葉子にとって今まで夢にも知らなかった世界であったことがやっと分かったということを物語っている。木部に対する過去の華やかな輝きは「西に沈」んだように薄れると、それと同時にもう一つの別な木部が葉子に見え始めたのである。それは葉子にとっては想像もしたことがない全く違う別な木部の「裏」の面が自分の考えを裏切るように迫ってきたことを意味するのではないだろうか。それは、<性>というものの本当の姿への芽生えを通して、男という実体が分かるようになったということでもある。

すると、ここで言う葉子がやっと分かった木部の実体とは一体何であろうか。否、木部と言うより、男そのものの実体であるかも知れない。いずれにせよ、葉子が気付いたその実体とは、いったい何だったのだろうか。

結婚する前に人々から讃えられた英雄としての木部の面影は薄れ、今はただの平凡で弱すぎる程無気力な男に過ぎない。そればかりではなく、今までおくびにも出さなかった坊ちゃんてわがままな態度を見せ始める。それに、「極端な潔癖屋」であると思ったが、それが「貪婪な陋劣な情欲の持ち主」にすぎなかったこと。それから、なによりも「貧弱な体質」の木部の姿が徐々に葉子の目から見え始まったのである。先の引用では、大体このような思いもかけなかった葉子の不満が述べられている。

これを見る限りでは、葉子不満は一見して一般的に男女のあいだにありがちな出来ことであるようにも見えなくもない。即ち、結婚の前は二人の間はこれ以上ない理想的な間柄であることへの確信を持っている。しかしそれが結婚した後、徐々にその理想がまるでバブルが弾けるようにあともなく消え去ろうとすることがよくある。恐らく、葉子と木部の間もこのような一般的なプロセスによく似ているかも知れない。しかし先の引用を含めて、作品の前後を丹念に読み替えてみると、男女の一般的な不満だけを物語っているのでは決してないような気がする。どちらかという、先の引用の内容は、葉子不満と言うよりも、ある種の不安を抱いていたように思われるのである。そのように思う理由は、他ではなく次の二番目の傍線の部分である「葉子は今まで自分でも気がつかずにいた自分を鏡で見せつけられたような不快を感じずにはいられなかった」と思っていたように、葉子は木部を見ていたのではなく、木部という「鏡」を通して自分自身を見ていたからである。

木部という「鏡」を通して自分自身を見ていた、これは一体何を意味するのだろうか。木部の何が「自分を鏡で見せつけられた」というのだろうか。そして、それが一体いかなることで「不快を感じた」のだろうか。それより、木部という存在がどうして葉子の「鏡」になるのか。葉子の目に木部が「鏡」に映されるような二人の間の特別な関係があるのだろうか。なければ、そもそもここで言う「鏡」そのものの意味は、一体何であるのか。これらの疑問を明らかにするため、さらに論を進めてみよう。

葉子が木部に対して何よりも「不快を感じていたことは、以前の輝きが薄れると共に、おとずれた無気力な男の姿もあろうが、なによりも引用で言う「貪婪な陋劣な情欲の持ち主」として映られた木部の醜い欲情であっただろう。このような醜い欲情に満ちた木部の姿は、結婚前には思いもなかったことだけに、その驚きや「不快」感は一層大きかったに違いない。しかし、厳密に考え直してみると、何よりも最も葉子に衝撃をあたえたのは、木部の「貪婪な陋劣な情欲の持ち主」としての姿はいうまでもなかろうが、それよりも木部のいわゆる「偽善」に満ちた行動に、より根元的な原因があるようである。つまり、初めは「崇高と見えるまでに極端な潔癖屋」だと思っていた木部がそれとは裏腹に「貪婪な陋劣な情欲の持ち主」として見られたこと。これは木部の「英雄」として人々から讃えられた時の第一印象と結婚後の木部像との間の格差が大きいだけに、葉子が受けていた衝撃はより一層強かったであろう。今は結婚前の木部の姿は、影もなく薄れ、ただ、欲情に浸された醜い木部でしか葉子には映っていない。

しかし、葉子はこのような木部の姿を、木部その自身の問題としてみていたのではなかったのである。誰よりも自意識の強い葉子は、このようなある意味で非常に偽善的とも言える木部の行動に、自分をダブらせ、自分を省みていたと思われる。つまり、「鏡」にしていたのである。ここで言う「鏡」ということの意味は、木部に見られる「性」の問題や「偽善」の問題が、木部その人の問題ではなく、ごく一般の問題であることの意味としての「鏡」ではなかっただろうか。即ち、葉子は木部ではなく、人間そのものがいかに醜い「性」という問題を抱えているか、そしてその醜い「性」のために人間の「偽善」性が現れるということを感じ取るに至るのである。これが葉子にはまた受け入れられなかった。そのような気持ちがやはり木部とのこれ以上の結婚生活を続ける原動力を失わせてしまったのであろう。とうとう木部と葉子の結婚生活は、あっという間に終りを告げたのである。

以上が木部と葉子の出会いと、そして別れである。このような木部との出会いと別れが葉子に残したのはなんであったのだろうか。まず、子持の離婚した女という社会的に痛い勲章を貰ったことが考えられる。それから、親の反対にも関わらず、我を張って一步も譲らなかったことが間違った結果になったこと。木部に対する失望、結婚ということの実体、などなど様々な後悔に苛まれていたであろう。いずれにせよ、葉子はこれ以上結婚生活を続けることができず、木部と別れてしまうのである。

IV. 「本能」もしくは<性>への芽生え

木部との結婚、そして離婚が葉子に残したものは、何であったのか。それは、まず考えられることは前章でも調べてみたことであるが、思いもなかった色々な痛い経験をしたことであろう。が、それよりも最も注目しておくべきことは、葉子の<性>への芽生えではなかったのではないと思われる。ここで言う<性>への芽生えということの意味は、一般的に言われる一人の少女が<性>に芽生えたという、ある種の成長物語りのようなことを意味するのでは決してない。それよりもここで言う葉子の<性>の芽生えとは、ごく一般的に考えられるセクシュアルな面の<性>と、木部との結婚生活を通して経験したつまり葉子に「貪婪な陋劣な情欲の持ち主」として映された木部の<性>への欲求、即ち<性>そのものの裏に潜んである醜い面をも含めた<性>の両面に芽生えたというような意味である。

そしてこの<性>の芽生えだけではなく、もうひとつ見逃しては、いけない重要なことがある。それは他のことではなく、前にも言及したが、<性>の醜い欲求を裏に隠す<偽善>たる木部。そしてそれを見た葉子は木部ではなく、まるで「鏡」に映る自分をみたように、人間のいわゆる<偽善>という側面を葉子は木部との結婚生活を通して、見てしまったと言ふことであろう。このような筆者の推論を検証するために、ここで、もう一度、木部という人物について振り返って見る必要があると思われる。

もう既に言及したことであるが、木部という人物は、だれが見ても優れた、そして「天才風」の綺麗な外貌の持ち主であった。そればかりではなく、当時の日本社会で「破天荒」という凄い勢いで、人々から人気を一身に受けていた人物でもあった。葉子も勿論、このような華々しい木部に関心を注いでいたことは、いまさら言うまでもないことである。木部という人物は、どちらかという前途が囑望される「崇高と見えるまでに極端な潔癖屋」の人柄の人物であった。つまり、木部は誰が見ても秀麗な外貌で申し分のない人格の人かのように思われたはずであろう。やはり、葉子もそのような人並みはずれの優れた相手と思っていたし、そうだと思っていたからこそ、母の反対にも関わらず、我を通して結婚までしたのではなかったのか。

執拗にまでの母の反対にも負けず、自分の確信を信じ、木部と結婚はしたものの、「崇高と見えるまでに極端な潔癖屋」であると思っていた人がいざ結婚してからはからっと別人のように変わってしまうのである。葉子は殆んど無能力なこと、「情欲」を丸出しにすること、葉子を驚かせるばかりでなく、失望させる幼稚的な行動などを身近で経験してしまったのである。思いもがけなかった木部のこのような行動に、葉子は驚きや「不満と失望」に浸され、どうしていいか「いらいら」するばかり、途方に暮れてしまうのである。

葉子は思いもなかった衝撃的な出来事に会わされてしまう。結婚以前の「英雄」たる面影や秀麗な外貌とはうらはらに、「情欲」をまんまと丸出しにする木部。そのような木部の姿は、他の人は知らないことではあろうが、特に葉子にだけは<偽善>たる木部に過ぎなかったはずであろう。そしてその木部の<性>的な醜い様態を身近で見てしまった葉子

は、ある種の驚きと失望で、めまいがするほど戸惑っていたことは、容易に察せられることであろう。勿論、木部の「情欲」に満ちた<性>的な醜い様態は、結婚の前は思いもしなかったことだけに、驚きと衝撃を葉子にあたえるに十分であった。しかし、最も葉子を当惑させたのは、木部の<性>的な醜い様態ではなかったと思われる。それよりも最も根本的な問題がそこにはあったのではないだろうか。

それについて検討を進める前に、ひとまず、前章で挙げられた引用に再び注目しておく必要がある。特に、先の引用の二番目の傍線のところであるが、これは注目に値する非常に重要な一節であると思われる。それは、木部の<性>的な醜い様態を経験した葉子が独り言のようにつぶやく一節であった。そこで、葉子は「今まで自分でも気がつかずにいた自分を鏡で見せつけられたような不快」感を覚えたことを驚き半分の気持で述べられている。この葉子の独り言の意味は、一体何を意味するのだろうか。恐らく、それは葉子が木部の<性>的な醜い様態を通して、まるで木部の姿が木部だけの問題ではなく、もしかすると、自分にも内在している問題かも知れないという、<性>そのものの本質的な問題に芽生えたことを意味するのではないだろうか。つまり、この引用の一節が物語っていたのは、葉子の驚きや衝撃もしくはある不安感ということの、より根本的な原因が木部その人の行動にあったのではなく、今まで葉子の気づいていなかった<性>そのものの醜さがやっと見え始めてきたということである。これが葉子を衝撃に追い詰めた根本的な原因であったと思われるのである。

もう一つの原因として、見逃がしてはいけないことは、<偽善>という問題である。つまり、人々から知られていた木部の外貌と人々は夢にも知らない木部のもう一つの裏面。ここで言う木部の裏面というのは、他ではなく「情欲」に満ちた全く違うもう一つの姿が相両立するという<偽善>の問題がそれである。人々から見られている木部の外貌と人々は知られざる<性>の醜い様態という全く異なる表裏なる木部の行動から露呈された、そしてそれが象徴する人間の<偽善>的な一面を目の当たりに見てしまった葉子は、やはり我慢が出来なくなってしまったのであろう。

葉子は木部を通して経験した<性>そのものの醜さであれ<偽善>であれ、「自分でも気がつかずにいた自分を鏡で見せつけられた」と葉子自身が言っているように、それらは木部の問題に止まっていたのではなく、もしかすると葉子自身の問題ではないだろうかという恐れが芽生え始めていたと思われる。今まで知らなかった自分に内在されているはずの<性>と<偽善>の問題が木部と同じように自分も繰り返すのではないだろうか、否それよりも葉子自身にも既に内在されている問題で、それを受け入れる心の準備が出来ていなかったのではなかったのではないだろうか。葉子の驚き、葉子の「不満と失望」、葉子の不安は、恐らくそこにあったと思われる。

葉子はこのような不安に苛まれ、居ても立っても居られなくなり、<性>と<偽善>の悩みから逃れるためにも木部と別れることを決心したのであった。このようにして短かった二人の結婚生活は、はかなく終りを告げるのである。しかし、葉子は木部と別れることで、<性>と

<偽善>の問題から逃れることができたのだろうか。この<性>と<偽善>の問題が木部その人だけの問題であったならば、そこから逃れることも不可能なことでもないはずである。だが、前にも言及したが、葉子が「自分を鏡で見せつけられた」と言ったように、<性>と<偽善>が木部を通して芽生えたとは言え、すでに自分の内面に内在していたものではなかったのかという認識がおぼろげながら葉子にはあったと思われる。つまりこの<性>と<偽善>の問題は、木部の問題でもあったが、それと同時に葉子自身の問題でもあるという認識が徐々に芽生え始めていたのであった。周知の通り、勿論この問題は二人だけではなく、人間そのもののごく一般的な問題であるかも知れない。いずれにせよ、葉子は木部と別れたからといって、きれいさっぱりこの<性>と<偽善>の問題と立ちきることは出来なかったはずであろう。

とにかく、葉子は人間の<性>の醜さやその醜いところを隠すための<偽善>という人間そのものの醜面に、否それよりも自分の内面に内在されていることに木部という登場人物を通して、始めて気づいてしまったことは、確かである。つまり、木部という登場人物との出会いがいかなる影響を葉子にもたらしたのかを考える際、以上の論述をふまえた上で言い得ることは、<性>そのものと木部の結婚前後の全く相反する両面が象徴する<偽善>についての芽生えであったと言えることが出来よう。

まるで、創世記に出てくる善悪果を味わってしまったイブのように、木部を通して人間の<性>と<偽善>に始めて芽生えてしまった葉子は、木部と別れたからといって、木部と出会った以前の才気煥発な少女の葉子には、もう戻れることは出来ないのである。もう19才の若い少女ではなく、子持の離婚女であり、以前の<性>に対して純粹に思っていた少女ではもうなく、人間の内在されている醜い<性>を味わった女に変っていたのである。登場人物の木部は葉子に、このように新たな世界へ導いた作品上の重要人物の役を担っていたのであった。

人間の醜い<性>と<偽善>を味わってしまった葉子の前途に待ち構えていたのは、何であろうか。『或る女』という作品は、ある意味ではこのように人間の醜い<性>と<偽善>を味わってしまった葉子が自分の前に置かれている、どの道を選択するのかという二者択一の物語でもあったと思われる。もう少し説明を加えておくと、葉子のアメリカ行きは婚約者の木村に会いに行く道であった。しかし、アメリカ行きの船の中で出会った運命の人の倉知と愛に落ち、葉子に選択を強いられることになる。木村か倉知か。結局、葉子は婚約者の木村ではなく、倉知を選択することになる。『或る女』という作品の一番の要に当たる倉知への選択が葉子を結局に不幸に導く一つの原因であったことを思えば、なぜ葉子はその不幸になるにも関わらず、倉知を選んだのかという疑問に対する答えは、既に木部との出会いにその原因があったと言えよう。つまり、葉子は未来の不幸への道を恐れることなく倉知を選んだことは、今まで考察したように木部との結婚生活の経験を通して始めてめばえた<性>と<偽善>を味わってしまった葉子であるからこそ可能であったと思われるのである。

V. 結論

本論では、今まではあまり注目していなかった木部という人物について注目をしながら論じてみた。今まで注目されなかったのは作品でそれほど重要な人物とっていなかったからであろう。しかし本論で考察してみたように、木部は葉子にとってただの痛い過去歴を与える役を担う単純な登場人物ではなかったのである。しかも、主人公の葉子に多大な影響を及ぼし、一代変貌を与えるほど、木部は『或る女』という作品において欠かせない重要な人物であることは今までの本論での検証から判断すると、間違いないような気がする。

特に葉子像の形成過程において、大きな影響を及ぼしていたことは疑いをいれない。葉子の短かった木部との結婚生活を通して希望と失望、浪漫と現実、表と裏、というような世界を味わっていたのであった。その中でも特に<性>と<偽善>への芽生えは、葉子を別人に変えてしまった最も注目すべきことであつたことを本論を通して明らかにされたことであろう。

木村ではなく、倉知を選択することが破滅に向かうことであるのを自分でも感じていたはずの葉子がどうして自分の破滅の道であることを知りながら、敢えてその道を選んでしまったのだろうか。言うまでもなく、葉子自身も容易い選択ではなかったはずであろう。しかし結局木村ではなく、倉知を選んだ葉子の選択は、要するに決して偶然な選択ではなかったのである。このような葉子の選択には、今まで論じてきた木部との短かった結婚生活を通して芽生えた、即ち<性>と<偽善>への芽生えが大きく作用されていたことを本論を通して既に考察したことである。このように葉子と木部との出会いは『或る女』という作品において、一つの方向性、つまり葉子のこれからの行歩を予言する一つの機能を担っていたと言い換えることもできよう。

【参考文献】

- ※この論文のテキストとして使用していたのは、『或る女』（新潮文庫、1998年5月）を使用した。
- 政宗白鳥(1927)「有島武郎『或る女』」、『読売新聞』
- 本多秋五(1954)『「白樺」派の文学』講談社
- 奥野健男(1959)「有島武郎『或る女』の早月葉子」『国文学』
- 青山孝行(1961)「葉子の中のエリス—『或る女』の明晰な位置づけのために—」『国語と国文学』38-9
- 笹淵友一(1964)「『或る女』の主題—有島武郎研究—」『東京女子大学付属比較研究紀要』17
- 山田昭夫(1966)『有島武郎』明治書院
- 本多秋五(1967)「私小説にみた『或る女』」中央公論社版『日本の文学』の『有島武郎・長与善郎』の解説
- 安川定男(1967)『有島武郎論』明治書院
- 上杉省和(1985)『有島武郎一人とその小説の世界—』明治書院
- 増子正一(1994)『有島武郎研究』

要 旨

I discussed it while paying attention about a person called Kibe whom I did not pay attention to very much by the main subject so far. What did not attract attention will be because I did not think it to be such an important person with a work so far. However, Kibe was not the simple character who carried just the position who gave a career in the past who hurt for Yoko as considered by the main subject. Besides, as for Kibe, judging from the inspection by the conventional main subject, it feels like having to be it in the work called "a certain woman" to be an indispensable important person so as it has a great influence on Yoko of the chief character, and to give a change in a lifetime.

In the formation process of the Yoko image, the big thing that I had an influence on does not turn in particular on doubt. If hope and disappointment, a wave were abusive, I tasted reality, a list and the back and the world where it was said through a married life with short Kibe of Yoko. The sprouting to particularly <-related> and <hypocrisy> will be that it was clarified that it was the most notable thing that I have changed Yoko into another person through the main subject in that.

キーワード：偽善、性、女の本能、頭、心、登場人物

투 고 : 2011. 8. 31
1차 심사 : 2011. 9. 10
2차 심사 : 2011. 10. 1